

## 論文の概要及び審査結果の要旨

氏名	藤井清美
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲第24号
学位授与の要件	大阪総合保育大学学位規程第12条
学位授与の日付	令和4年3月21日
学位論文題目	発達障害児をもつ母親の精神的健康 —選択理論における基本的欲求と内的コントロールの観点から—
論文審査委員	主査 小椋たみ子（大阪総合保育大学教授・博士（文学）） 副査 渡辺俊太郎（大阪総合保育大学准教授・博士（心理学）） 副査 浜崎隆司（鳴門教育大学教授・博士（教育学））

### 〔1〕 論文の概要

本邦の超少子高齢化社会、核家族化の進行に伴い、孤立化をはじめ家族機能の低下、養育力の低下など子育て環境は大きく変化し、育児ストレス、育児不安など母親の精神的健康は昨今、大きな課題である。論者は看護師として臨床経験を経たあと、看護学校教員となった。その中で医療福祉を融合した障害者施設を母体とする看護学校に勤務し、障害児の母親の健康課題について、より関心を抱き、メンタルサポートの一環として看護の視点からの研究を進めてきた。また、論者自身の育児での苦悩の解決のために参加したセミナーで Glasser, W. (1925- 2013) が提唱する選択理論に出逢い、本研究の着想に至った。発達障害児をもつ母親は精神的負担が大きく、抑うつなど精神的不健康を抱えていることもある。容易に育児困難感に陥りやすい発達障害児の母親が生き生きと自分らしく生活できるためには、ヘルスプロモーションの概念により自らで精神的健康の保持または精神的不健康を予防できる支援の方法を考案することが必要だと考え、選択理論に依拠し、本研究を遂行した。

本論文は以下の章からなりたっている。

#### 序章

#### 第1章 研究の背景

#### 第2章 自閉症スペクトラム障害児の母親の主観的な基本的欲求に関する研究

#### 第3章 就学前の子どもをもつ母親の基本的欲求と内的コントロール、育児困難感に関する調査

#### 第4章 選択理論による発達障害児の母親の精神的健康に関する提言

#### 終章 総合的考察

第1章では、発達障害児の母親の精神的健康課題について選択理論から母親の精神的健康への支援の可能性について検討した。発達障害児の母親の精神的問題は、子どもの行動特性が直接の要因ではなく、母親自身の育児困難感という認知的な要素が育児不安や抑うつに関連しており、精神的不健康を生じ、家族機能やQOLにネガティブに影響していると論者は推察した。さらに、母親が子育てを肯定的に捉えられるような認知的変化を促す支援の介入が必要であるとし、論者は母親の精神的健康への支援の可能性を選択理論に見出した。

選択理論の提唱者である Glasser, W.は精神的健康と基本的欲求について言及しており、5つの基本的欲求の愛・所属、力、自由、楽しみ、生存の欲求を満たすことが精神的健康にとり重要であることを指摘している。そのなかでも愛・所属の欲求を満たすことを重要とし、愛・所属の欲求を満たすためには、身近な人との人間関係を良好にすることを推奨した。また、Maslow, A.H.の階層性の基本的欲求と Deci, E.L. らの自己決定理論の基本的心理欲求についても検討した。しかし、Maslow の基本的欲求は生理的の欲求への比重が高いことと、Deci らの基本的心理欲求には、自由と楽しみの欲求に類似する欲求が含まれず、母親を社会的存在の生活者として捉えるならば、自由と楽しみの欲求は欠かせないものであると考え、選択理論の基本的欲求に注目した。さらに、選択理論では、人は外側からの刺激によって反応し、行動を起こすのではなく、人は内側から動機づけられて行動を起こすとしている。その内側から動機づけられているのが、5つの基本的欲求であり、人間関係において欲求充足を図る際、他者よりも自分をコントロールすることを勧めている。育児困難感に陥りやすい発達障害児の母親が自らをコントロールし、基本的欲求を充足させることは、育児困難感の緩和に繋がり、精神的健康への一助になると論者は考えた。

第2章では、障害児のなかでも最も母親のストレスが高い自閉症スペクトラム障害児（Autism Spectrum Disorder : ASD、以下、ASD 児と記す）の母親 10 名を対象に、半構成的面接を行い、得られたデータを質的帰納的に分析した。分析においては、選択理論の5つの基本的欲求に依拠し、母親の主観的な基本的欲求の状況を明らかにした。その結果、ASD 児をもつ母親の主観的な基本的欲求が満たされている状況では、生存の欲求の『体調が良好である』、愛・所属の欲求の『身近な人が心の拠り所である』、自由と楽しみの欲求の『自由に楽しむ時間がある』、力の欲求の『自己肯定感が高い』がコアカテゴリーとして見いだされた。母親の主観的な基本的欲求が満たされていない状況では、生存の欲求の『子育てによる心身の健康のゆらぎ』、愛・所属の欲求の『身近な人との信頼関係への不満』、自由と楽しみの欲求の『自由に楽しむ時間の不足』、力の欲求の『自己肯定感の低さ』のコアカテゴリーが見出された。また、基本的欲求が満たされている状況と満たされていない状況における欲求間の関係を考察し、愛・所属の欲求は、力、自由、楽しみ、生存の欲求に関係していたため、愛・所属の欲求が満たされないと他の欲求も満たされにくい状況であること、自由と楽しみの欲求は生存の欲求にも関係していたため、身体的健康を維持するためにも自由と楽しみの欲求を満たすことも重要であるとしている。

第3章では、就学前の定型発達児の母親293名と発達障害児の母親94名、合計387名を対象に、選択理論の5つの基本的欲求（愛・所属、力、自由、楽しみ、生存）と内的コントロール、育児困難感、抑うつについて、質問紙調査を行った。選択理論の5つの基本的欲求に基づいた項目を設定し、因子分析で検討した結果、愛・所属と力の欲求を主とした“母親としての基本的心理欲求”と自由と楽しみの欲求を主とした“自由に楽しむ欲求”の2つの因子が抽出された。また、第1因子の“母親としての基本的心理欲求”で、因子負荷量が一番高かった項目は、Glasserの愛・所属の欲求の「家庭は温かい場所であり、リラックスできている」で、愛・所属の欲求を充足させることがいかに必要であるかが明らかとなった。次に因子負荷量が高かった項目は、力の欲求の「母親としての役割を肯定的にとらえている」で、愛・所属の欲求とともに母親にとって重要であった。また、内的コントロールの項目の因子分析の結果では、人間関係を壊す“他者への非難”と、人間関係を築く“他者への勇気づけ”、“他者への信頼”の3因子が抽出された。また、育児困難感と抑うつの項目の因子分析の結果では、“育児困難感”と“抑うつ傾向”、“攻撃衝動性”の3因子が抽出された。

因子分析で抽出された基本的欲求の2因子、内的コントロールの3因子、育児困難感、抑うつの3因子を変数として、「基本的欲求の充足は内的コントロールと精神的健康に影響している」との仮説をたて、定型発達児の母親群と発達障害児の母親群を対象に、多母集団同時分析を行った。その結果、両群とも“母親としての基本的心理欲求”のみが、“他者への勇気づけ”と“他者への信頼”に関連しており、母親の基本的心理欲求を満たすことで、気分は安定し、対人関係が良好になることが明らかとなった。また、両群とも“母親としての基本的心理欲求”は、“育児困難感”と“抑うつ傾向”、“攻撃衝動性”に関連していた。さらに、定型発達児の母親群では、“自由に楽しむ欲求”は“育児困難感”と“抑うつ傾向”に関連していたが、発達障害児の母親群では、“自由に楽しむ欲求”は“育児困難感”と“抑うつ傾向”に関連していなかった。定型発達児の母親においては、リフレッシュすることが育児困難感や抑うつの軽減に繋がるが、発達障害児の母親においては、自由に楽しむことが直接、育児困難感や抑うつを緩和するわけではなかった。つまり、発達障害児の母親は、母親としての自信や家族のサポートを得ることが育児困難感や抑うつ傾向への緩和に繋がることが明らかとなった。さらに、定型発達児の母親群において、“他者への非難”が“育児困難感”と“抑うつ傾向”、“攻撃衝動性”に関連していた。しかし、発達障害児の母親群では、“他者への非難”は“攻撃衝動性”のみに関連し、“育児困難感”と“抑うつ傾向”には関連がなかった。母親の基本的心理欲求が育児困難感、抑うつ傾向、攻撃衝動性に関連していることは定型発達児、発達障害児の母親においても見いだされた。愛・所属と力の欲求を満たすことで育児困難感の軽減と抑うつ、攻撃衝動性への予防に繋がり、積極的に欲求充足を図る支援の必要性が示唆された。さらに、定型発達児の母親のみであったが、人間関係のなかで、他者を非難する行為が育児困難感と抑うつ傾向、攻撃衝動性に関連していることは、他者を外的コントロールすることは精神的に健康に繋がることが明らかとなった。

第4章では、発達障害の子どもをもつ母親の精神的健康について、第2章、第3章でえら

れた知見をもとに選択理論の観点から検討した。第3章の結果から、定型、発達障害を問わず、母親は基本的欲求のうち、愛・所属、力の基本的欲求が満たされることにより、母親としての肯定感、満足感を得られ、育児困難感の減少や精神的健康が維持されること、また、その傾向は発達障害をもつ母親のほうが高いことが明らかとなった。また、母親において、基本的欲求の充足は、他者への勇気づけ、他者への信頼といった人間関係を構築するための自らの行動を統制する内的コントロール力の強さに関連していた。

母親にとって、良き理解者である専門職との出会いは、否定的に捉えやすい子育てを肯定的に変換させる機会であり、愛・所属と力の欲求を満たす転機でもある。欲求充足のためのスキルを促進させるヘルスプロモーション支援のプログラム構築が今後の課題である。

終章では、発達障害児を育てる母親への支援には、母親だけでなく、その家族が孤立することなく、社会、地域が支えていくことの重要性とともに、選択理論の観点から母親の健康教育への必要性を論じた。本研究における今後の課題は、発達障害児をもつ母親の健康教育を主体とした支援プログラムを構築し、実践しつつ、プログラムの有効性を検証していくことであるとしている。

## 〔2〕 審査結果の要旨

大阪総合保育大学課程博士審査基準に添い、本研究の評価を述べていく。

第一の研究業績を踏まえた集大成であると認められる点については、論者の看護師として、また、個人的な経験を起点とする問題意識を追求したことは評価に値する。小児看護は子どもの疾病、障害の有無に限らず、あらゆる健康レベルの子どもと家族に携わる領域である。小児看護学に携わる者として、子どもと家族への支援は必須であり、苦悩する母親の心理的要素を理解する上で、選択理論に着目し、その有効性を長年にわたり、追及し、成果をまとめることができたことは評価に値する。

なお、本論文の第1章、第2章、第4章は、以下の雑誌等に公刊された内容であるが、本論文執筆にあたり、加筆修正を加えたものである。

藤井 清美・牛尾 禮子.(2017). 自閉症スペクトラム障害児をもつ母親の主観的な基本的欲求が満たされている状況に関する研究. 家族看護学研究, 22 (2), 108-121.

藤井 清美・牛尾 禮子.(2020). 自閉症スペクトラム障害児をもつ母親の主観的な基本的欲求が満たされていない状況. 日本看護福祉学会誌, 25 (2), 1-18.

第二の独創性については、第1に選択理論の中核概念である「基本的欲求」と「内的コントロール」について母親という限定的な集団についてであるが明確にした点にある。5つとされる基本的欲求は、母親としての肯定感をあらわす論者が「母親としての基本的心理的欲求」と命名した因子（選択理論では、愛・所属の欲求と力の欲求）と、「自由に楽

しむ欲求」（選択理論では、自由の欲求と楽しみの欲求）の2つで構成されていることを見出した。また、選択理論で重視されている「内的コントロール」は「他者への非難」「他者への勇気づけ」「他者への信頼」の3つの因子で構成されていることを見出したことである。第2に、定型発達児、発達障害児の母親の基本的欲求（母親の基本的欲求、自由に楽しむ欲求）と内的コントロールが育児困難感や抑うつ、攻撃性に及ぼす影響について、両群の類似性と差異を多母集団同時分析の高度な統計分析手法を使い明らかにしたことである。定型発達児の親は自由に楽しむ欲求をみたすことにより育児困難感、抑うつ傾向を軽減することができるが、発達障害児の母親の育児困難感、抑うつ傾向は軽減されないことを見出したことは本研究の意義として高く評価できる。

第三の申請論文の属する研究領域（看護学）において、その水準の引き上げに資するものであることについては、看護は健康という側面から生活の支援を施す。看護者は患者となる対象者のケアの方向性を導き出すために身体的、精神的、社会的側面から対象者を理解し、介入する。昨今、ヘルスプロモーションの概念によって、自らの健康を自らで維持増進することが求められている。そのようななか、身体的健康において、疾病予防や体力づくりなどの生活に即した情報提供は浸透しつつあるが、精神的健康への維持増進あるいは、精神的不健康への予防については十分に普及されているとは言い難い。本研究は、母親を対象としており、小児看護における子育て支援において、ケアの対象者となる母親の精神的健康への支援を今後進める中で、小児看護学に寄与する研究であるといえる。

第四の学際性については、本研究は、看護の対象である子育て期にある母親を対象にした調査であり、健康教育にあたり健康面からの生活支援を行う看護学、教育学において、学際性をもつ研究として評価を与えることができる。また、発達障害児の母親への精神的サポートをめざしており、臨床発達心理学、特別支援教育における保護者支援にも寄与する知見を提供している。

第五の本学大学院が授与する博士（教育学）の学位にふさわしいと認められることについては、本研究は小児看護領域から、発達障害児を育てる母親の精神的健康についての知見を見出したものであるが、これは保育学における保護者支援、家族支援の研究、実践に新たな知見を加えることとなり、保育学・教育学にも寄与できるものである。よって、本学大学院が授与する博士（教育学）の学位にふさわしいと考える。

以下に、博士学位請求論文公開審査会における質疑応答について主なものを記載する。

第一に、「何故、発達障害児をもつ母親の精神的健康に『選択理論』が有効なのかがについて議論がないままに本論文が構成されている。選択理論は、『選択理論心理学』ともよば

れているが、心理学の他の理論とも比較し、選択理論を位置付けてほしい」の質問に対して、「他の理論との対比については今後の課題としたいとの回答と、選択理論に基づく現実療法は、現在に焦点をあて、欲求から上質世界にむけ行動することを主張しており、実用的で現実的である」との回答を得た。

第二に、「第2章の自閉症児の母親の語りの質的分析では、個人をこみにして（子どもの障害の程度、母親の背景要因は異なる）、満たされた状況と満たされない状況における5つの基本的欲求を語りから分類し、さらに、欲求間の関連についても論じている。欲求間の関係についての結論に至る手続きをより明確にする必要がある。また、個人内での分析が必要ではないか」の質問に対しては、「コードからコアカテゴリーを行き来しながら、検討し欲求間の関係を導きだしたが、母親の個々の生活環境、家族関係、子育てに関する認識の違い、欲求の充足のあり方、感じ方は様々であるため、欲求間を検討する場合、事例的に分析したほうが、より欲求の関係性が明らかになったかもしれない。また、SCATのように分析手続きが明確になっている分析を用いたほうが欲求間の様相は明らかになったかもしれない」との回答を得た。

第三に、「第2章の質的分析について、質的研究であれば、手続きについて詳細な記載が必要で、どのような面接を行ったのか、どのような質問の仕方をしたかなど、その時の応え方の雰囲気や背景など心情が見えてくるので、一事例でも載せておいたほうが良いのでは」という質問に対しては、「インタビューについては、基本的には傾聴的な姿勢で、話しやすいように研究協力者のペースも大切にし、自由に語っていただくことに留意した。また、子育てに対して、夫の協力が得られず涙ぐむ母親もいたので、共感的姿勢で聴いた。しかし、そのデータはかなり個人のリアルに生活の様子が浮き彫りになるので、倫理的配慮から、論文には記載しなかった」との回答を得た。

第四に、「第2章と第3章で調査対象者の子どもの年齢が異なっており、子どもの年齢によって母親の悩みやストレスの様相は異なることも考えられるが、今回の研究結果はどのように捉えたらよいか」という質問に対して、「対象者は乳幼児の母親であることは共通しており、欲求の状況も乳幼児の子育てという観点から検討しているものの、対象者によってきょうだいなどの家族背景は異なっており、その影響については今後検討していく必要がある」との回答を得た。

第五に、「既存で行われている母親の支援のなかで、今回の研究で分かったことから提言できることを教えてほしい」という質問に対して、「愛・所属、力の基本的欲求が満たされることが精神的健康につながるという知見から、現在の日本社会における人間関係の希薄さや家族関係における課題に対する援助を行うことや、専門職との信頼関係づくりを促進すること等によって、母親の人生観や物事の見方、感じ方、価値観の変化が期待できることを提言したい」との回答を得た。

以上、博士学位請求論文公開審査会において審査委員により出された質問に対して、論者の考えを明確に述べた。選択理論の学問的、学術的位置づけなど課題はあるが、発達障害をもつ子どもの親だけでなく、子育て中の母親の育児支援を含めて、実用面で本論文の研究が社会に果たす役割は大きい。今後の研究の発展に期待したい。

よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと論文審査委員全員一致で判断した。